

「或る種の 構造バランスを大切に」 坂田涼太郎

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■ ルーツは「玄庵」

進路を決定するとき、特に男性は父親の影響を受けることが多いのかもしれない。坂田涼太郎さんもその一人。無類の建築好きの父上から、「変わった建物」の写真を見せられて育った。あるとき、特に建築家石山修武先生の「玄庵」に衝撃を受ける。「建物というより、原っぱに建ちエネルギーを放つ原石のように感じた」と。私も一時期に、石山建築を感じたくて、遠くまで車を走らせたことを思い出しました。

そんな流れで、早稲田大学で、建築を専攻した坂田青年。建築の世界にいざなってくれた石山先生の授業を受けるという喜びの日が来る。そして、当然(デス!) 激しい石山流教育に洗礼を受ける。学生達を、あの大きな目で見渡し、「この中で建築家になれるヤツなんていない!」「建築家は出自が重要なのだ!」とハッパをかけられた。坂田さんは、知らない世界のはじめて見る建築家の正体に恐れるばかりだったのです。今、話しながらも、その迫力に圧倒されているよう。が、働き出してから、石山建築の他をよせつけない存在感をあらためて感じていたのも事実。そのときは、まだまだ、知らないことが多すぎた坂田さんなのでした。

■ ホスピタリティを

石山先生の脅しに触発されたかのように、挑戦する姿勢を貫く構造家金箱温春さんの事務所へ入ります。「構造の面白さを、たっぷり学ばせてもらいました」と、金箱先生に心から感謝する坂田さんです。

所員時代のかげがえのない体験は、建築家青木淳さんの青森県立美術館に携われたこと。建築を今までとは違った切り口から見直して、これからつくっていくという思いに至ったといいます。

それは、「建築の優先順位は、ホスピタリティである」という精神。安全をおざなりにしないという設計の基



本的な姿勢です。そして、もうひとつは材料の特質のバランスを調整するという考え方。「或る種のバランスが…」と、坂田さんの独特の言いまわしで語ってくれます。その調整から出てくるディテールの仕掛け。青森県立美術館でも、図面では普通に存在していた壁が、模型を見ると、実は、床から浮いていた。

「この人も普通じゃないのだ」。青木淳さんの建築の神髄に触れて、またまたビッグな建築家から衝撃を受けたのでした。「或る種のバランスを保ちながら、建築を造っていきたい」。純粋な感性が真骨頂の坂田涼太郎さんのひとこと一言に、青木淳さんに書いていただいた建築技術での連載を思い出し、覇志堂も納得。

■ ビスの研究

「東京大学木質材料研究室に在籍しています」。エライ、院生しているんですね。自分でも予測していなかったが、木を勉強したいと思い立つ。やはり金箱事務所時代に、東京大学の稲山正弘教授との仕事で、木造に興味を覚えたのが発端でした。

研究テーマは建築用のビス。稲山教授は、社会人としての実務を経てから研究者になられた方だから、研究者と事務所経営の両立が、並大抵ではできなとご存知だろう。同時に、エンジニアとしての実務が、ユーザー目線からの開発につながるも。安心・安全をつかさどる構造家が、高品質のビスを追求する。試験データによる裏付けは、例えば木造旅館の耐震の接合部への利用や改修などにも不可欠なもの。近い将来、坂田さんの研究によって提案された優れたビスが、建築界へ出て行くことは間違いないだろう。

ハードな日常に、大学院での研究生活も加えたことは頼もしい限り。坂田涼太郎さんは最後までやり遂げるだろうと、覇志堂は目を離さないつもりです。